□横浜植物会と東京植物同好会

Botany Club of Yokohama and Botany Club of Tokyo.

平成元年（1989）は横浜開港130周年，横浜市制100周年で横浜植物会80周年にあたる．2年前に横浜市の片隅に転居して来た筆者に，この80周年式典に出席し，記念講演をするようにと横浜植物会の会長の村上司郎氏から要請があった．それで当日の10月28日に「開国思想と植物学」と題して講演をした．以前，昭和31年1月29日の例会に会員の久内清孝氏に頼まれて，同会でパリの国立自然誌博物館の話をスライドを用いてしたことを思い出した．

当日の記念講演会の際に，聴衆の一人，会員の中尾真弓女史から筆者執筆の「日本における自然史（誌）の歩み」(『国立科学博物館の百年史』所収，他書にも再収）の記事に「牧野は講師となってその後に植物学教室の学生の植物採集の指導にあたった．一方明治44年10月創設の東京植物同好会や横浜植物会で一般の人々に植物への愛好心を育ててきたことは大きな功績である」と書いてあるが，横浜植物会の方が東京植物同好会より早く創設されている」との注意を受けた．それで両会の創設年を身近の植物学者にきいてみたがはっきりしなかった．牧野植物同好会会員が知っていると思い金井弘夫氏にきいて川村かう女史に電話でおききすると横浜の方が東京より早いということだった．なにか文書でわかるものはないかと思い，ふと本誌をしらべることに気がついた．本誌第1巻第2号に東京植物同好会会員の田中常吉氏の「横浜植物会」(47－49pp)「東京植物同好会（50－52pp）の記事を見出した．これによると横浜植物会は明治42年10月（1909）の創立，東京植物同好会は明治44年10月（1911）の創立とはっきり書いてある．

横浜植物会の事務所は丸善薬店で会費は毎月1円，会場は幹事の松野重太郎氏の世話で神奈川県立第一中学校の博物学教室，毎月のように牧野富太郎博士を講師として山野に植物採集をしている．講演は第1回に柴田桂太博士，第2回に三宅驥一博士を招待して行われた．東京植物同好会は事務所は岡本省三氏宅，会費は毎回50銭，会員の希望で，会長と採集指導の講師に牧野富太郎博士が指名された．横浜と東京のこの会合の動静は本誌の初期の巻の紙面に毎号のように紹介されている．ちなみに牧野博士は「植物趣味の鼓吹」の記事を第1巻第3号（大正5年）と第4号（大正6年）とに執筆している．

筆者は小学生のときから牧野博士の名を知っていたが，中学時代は長崎，高等学校時代は山口ですごし，牧野博士にお会いしたのは大学の植物学科に入学してからである．筆者の先ほど引用の記事に大学生の指導の一方，同好会の指導と書いたが，牧野先生の大学生へと，また植物愛好家への指導ぶりの相違などについて誰かにくわしく聞くことができれば幸である．

なお欧文の標題に記した横浜植物会と東京植物同好会の英名ははじめてここに記したもので会として定めたものでなく本誌の編集者の指摘で造語したものであることを御了承願いたい．

（木村陽二郎 Yojiro Kimura）

□朱有昌（主編）: **東北药用植物** 1,300pp. 1989. 黒竜江科学技術出版社，哈尓濱．43元．中国東北地域の薬用植物図鑑．記相，成分，適応症などかなりくわしく記され，土名と産地がたくさん拾われている．維管束植物についてのものだが，付録として薬用藻類・菌類・地衣類・コケ類のリストがある．

（金井弘夫）

□小林義雄: **幻覚菌物語** 67pp. 1990. 自家出版（〒273 船橋市丸山町 5-33-1）．¥3,800（送料¥450）．うすい書物であるが，広い話題に富み，挿入図，写真も多くあって，一部の人たちには大変興味があると思われる．幻覚菌に注目し，その民俗学的，歴史学的研究にのめり込んだ Gordon Wasson さん（米・モルガン銀行），この類の菌に学名を与えた Roger Heim さん（国立自然史博物館，パリ），有毒成分の分析に成功した Albert

Hofmannさん（薬物化学研究所，スイス）の貢献の紹介に続いて，著者自身とこの人びとと菌との出合いが語られる．この際ベニテングタケが主体である．ある章は既刊の文の再録であり，ある章はワッソンさんの文献の日本訳である．著者はこの書の出版で採算がとれるとは全く思っていない．とにかく書いておきたいという思いでなされているようである．聞く所によると，「新生物妖異考」や，「仏跡巡礼紀行」「世界の影絵芝居」「アダムとイブ」も出来上がっているという．

（津山　尚）

□Wagner W.L., Herbst D.R. and Sohmer S.H.: **Manual of the flowering plants of Hawai,** 2 vols. (Bishop Museum Special Publication 83). 1,853pp. 1990. Univ. Hawaii Press & Bishop Museum Press, Honolulu. $85. ハワイ諸島は大陸から遠く隔った海洋島であり，そのフローラは固有種が多いことで有名である．ハワイ諸島の植物誌としてはHillebrand (1888) のFlora of the Hawaii Islandsがあるが，本書は約7年をかけてこれまでの知見を整理し，必要と考えられた分類群については新たな調査・研究により分類学的再検討を加え，ハワイ諸島に生育する顕花植物を明らかにしたものである．本書で扱う地域はミッドウェイ島近くのクエ環礁よりハワイ島に至るハワイ列島であるが，このうち最東南部に位置するハワイ諸島と呼ばれる8つの島で99.9%の面積が占められ，植物の種数もこれらの島に集中している．構成は，序文（概要，地質，気候，植生），本文（科・属・種への検索表，異名・英名・原地名，記載，生育地，分類上のコメント，用途），用語解説，引用文献及び索引より成り，固有種を中心に約半数の種には線画が示されている．本書に挙げられた植物はハワイ列島に生育する，又は生育していた1,817種であり，このうち古くからの自生種は956種，うち89%のものが固有種である（分類群としては1,094，うち91%のものが固有）．著者らの他に執筆者として，アメリカを中心にヨーロッパの他環太平洋地域より計55名の研究者が参加し，日本からは大橋広好氏が*Desmodium*属を担当されている．本書の最大の特徴は，全体にわたって分類学的再検討を行い，従来充分には扱われていなかった帰化植物も網羅したことであるが，記載にはこれまでに報告された染色体数が含まれ，しかもその材料がハワイのものかどうかが示されていたり，帰化と考えられる種ではハワイ諸島で最初に採集された標本が，又標本より描かれた線画では基となった標本が明示されているなど，細かく正確な情報を提供しようとする姿勢がうかがえる．一方，近年急速に関心が高まっている種の保護の気運を反映して，絶滅が心配される種にはIUCNのカテゴリーに従いシンボルが付けられているが，ハワイ諸島に古くから生育する1,094分類群のうち，すでに絶滅したと考えられるもの〔Ex〕: 107 (10%)，絶滅寸前のもの〔E〕: 139 (12%)，危険な状態にあるもの〔V〕: 39 (4%)，稀なもの〔R〕: 138 (12%) となっており，全体のうち38%のものが絶滅もしくは絶滅の危機にあるという．これを属単位で見ると，例えば固有属でありかつハワイ列島における最大の属であるキキョウ科の*Cyanea*属では52種9亜種のうちEx: 16種1亜種，E: 8種1亜種，V: 2種，R: 1種2亜種となっており，限られた地域で多様に分化した植物の生存の困難さと保護の必要性が切実に感じられる．本書は，その扱う地域が島という明確に区切られた単位であり面積も四国よりやや小さい程度という狭さや，固有植物が多くこれまで多くの研究者により調査が進められているという背景もあろうが，現時点における世界でも最も進んだ植物誌の一つと言え，著者らがManualと名付けたこともうなづける．

（三木栄二）